Faculty of International Relations

20 YEARS ANNIVERSARY

since 1986

2006

20th ANNIVERSARY 1986-2006

大東文化大学

DAITO BUNKA UNIVERSITY

国際関係学部20周年記念誌

أقامَ في القاهرةِ أسبوعين أو أكثرَ من أسبوعين ، لا يَعرِفُ مِنْ أَمْرِهِ إلا أنَّهُ تَرَكَ الريفَ وانتقلَ إلى العاصِمَةِ لِيُطيلَ فيها المَقامَ طالبًا للعلمِ مُحَلِّقًا إلى مَجالسِ الدَّرسِ في الأزهرِ ، وإلا أنه يقضي [illegible] الأطوارِ الثلاثةِ التي يتخيَّلُها ولا يُحقِّقُها .

فهوَ يَسْكُنُ بيتًا غريبًا يَسْلُكُ إليه طريقًا غريبةً أيضًا ، يَنحرِفُ إليها نَحْوَ اليمينِ إذا عادَ مِنَ الأزهرِ ، فيدخُلُ من بابٍ يُفْتَحُ أثناءَ النَهارِ ويُغلَقُ في الليلِ ، وتُفْتَحُ في وسطِهِ فَجْوَةٌ ضيقةٌ بعدَ أن تُصَلَّى العِشاءُ . فإذا جاوزَ هذا البابَ أحَسَّ عن يمينه حَرًّا خفيفًا يبلغُ صفحةَ وجهِهِ اليُمْنَى ، ودُخَانًا خفيفًا يُداعبُ خَيَاشيمَهُ ، وأحسَّ من شِمَالِهِ صوتًا غريبًا يبلُغُ سمعَهُ ويُثيرُ في نفسِهِ شيئًا من العَجَبِ .

وقد ظلَّ أيامًا يَسْمَعُ هذا الصوتَ إذا عادَ من الأزهرِ

目 次

03 国際関係学部
『20周年記念誌』刊行によせて 20周年記念事業委員会委員長 篠田 隆

04 挨拶 国際関係学部開設20周年を迎えて
国際関係学部 学部長
押川 典昭 教授

現役と卒業生をつなぎたい
国際関係学科 学科主任
新納 豊 教授

「20年の経験」
国際文化学科 学科主任
田辺 清 教授

06 座談会 「国際関係学部20周年記念座談会」
国際関係学科 新納 豊 教授
国際関係学科 E.マーゲル・Jr.教授
国際文化学科 片岡 弘次 教授
国際文化学科 樋口 桂子 教授
1988年度入学 福来 順子(旧姓・藤田)さん
1998年度入学 吉野 航太 さん
2003年度入学 舘野 麻未 さん
司 会: 押川 典昭 教授

22 祝辞 お祝いメッセージ
退職教員(退職年度順)
現地研修提携大学

26 近況 卒業生のページ
卒業生(卒業年度順)

40 随想 お世話になったあの方々
国際関係学部第二研究棟事務室 古海眞子 さん
入試部長 小田嶋武行 さん

42 メッセージ 教員寄せ書き(赴任年度順)

56 CAMPUS キャンパス・ライフ 国際関係学部で学ぶこと
国際関係学部生が創り出すイベント 地域研究学会の活動

60 PHOTO 思い出写真館 ―写真で振り返る学部20年の歩み―

国際関係学部
『20周年記念誌』刊行によせて

大東文化大学国際関係学部は学部創設20周年（1986年４月開設）を迎えました。学部創設時の高坂駅周辺はほんとうに閑散としたものでしたが、当時数少なかった「国際関係」を冠する学部の一員として、学部にどのような内実を与えてゆくのか、教職員も学生も手探りの状態で、その緊張感が快く感じられたことを記憶しています。

この20年間に学部や大学を取り巻く状況は大きく変化しました。80年代後半からのバブル経済は90年代初頭に崩壊し、長期間にわたる平成不況に入りました。閉塞した時代状況のなかで、「ニート」や「パラサイトシングル」などの造語もうみだされるほど、若者の社会観や人生観が変化しました。少子化も急速に進行し、大学再編の時代を迎えます。そのなかで教育の質も厳しく問われることになります。大学や学部がどのような理念のもとでどのような人材を養成しようとするのかを、卒業生や父兄を含む大学関係者のネットワーク化のなかで検討していくことが、大学学部を活性化し、その社会的役割を高めるために必要になっています。

国際関係学部は創設20周年の記念事業を推進するために、昨年４月に「20周年記念事業委員会」を編成し、記念事業の実施に向けて検討と準備を進めてきました。今回の記念事業の内容は、（１）記念刊行物の発行（２）記念式典と祝賀会の開催の２つに絞られました。

同委員会には、企画に卒業生や在校生のアイディアを反映させるために、教職員委員のほかに、卒業生と在校生若干名にも委員として参加してもらいました。大学や学部の創設を記念する事業は、ともすると「教職員による教職員のための」記念事業になりがちですが、国際関係学部の20周年記念事業では、企画編集の段階から卒業生と在校生委員に参加してもらい、卒業生と在校生はもちろんのこと、父兄やその他学園関係者にも興味をもってもらえるような内容、かつ外部に対しても国際関係学部の独自性や個性をアピールできるような内容になるように工夫しました。

記念刊行物は、できるだけ人物に焦点を当て、気軽に読め、かつ読んで面白い内容になるように配慮しました。目次を一読していただければわかるように、多数の卒業生、在校生そして教職員の皆様に執筆していただくことができました。いずれの文章からも国際関係学部に対する思い入れの深さが伝わり、共感のもてる内容になっています。

とくに、卒業生の文章は力作揃いで、現地研修、留学あるいは貧乏旅行を通しての他のアジア諸国との交流が、現在の彼らの旺盛な行動力としなやかな価値観の原点になっていることが確認できます。

現職教員の寄せ書きは着任年度順に配置しました。卒業生が在学時に直接お世話になった先生方、卒業後に着任された先生方の区別がはっきりとします。定年退職された先生方からいただいたメッセージは、現地提携校からのメッセージとともに、祝辞の欄に掲載しました。

座談会は本記念号の背骨にあたります。座談会には教員、卒業生、在校生の有志が参加してくれました。国際関係学部が辿ってきたこの20年間の道筋が、裏話を含め、よく理解できます。

結局、人間にとっての最高の財産は、人とのつながりの深さと多様さだと考えます。学生時代の友人、恩師、職員とのつながりを卒業アルバムに閉込めておくのは勿体無い気がします。今回の20周年記念事業が、卒業生、在校生、父兄、教職員など学部関係者のネットワーク強化の一助になることを強く願います。元気の源泉となるような、場合によっては、人生観や価値観をひっくり返してくれるような再会になることを祈ります。

20周年記念事業委員会委員長

篠田　隆

20周年記念事業委員会委員

●教　員：石田英明、大石敏之、小泉康一、篠田隆、須田敏彦、福家洋介、伊藤正子（2005年度のみ）

●職　員：大嶋文昭　●卒業生：福来（藤田）順子、吉野航太、米倉愛（2005年度は在校生委員）　●在校生：竹之内洋輔

国際関係学部
学部開設20周年を迎えて

国際関係学部 学部長
教授 押川 典昭（おしかわ のりあき）

1986年4月に大東文化大学の五番目の学部として設置された国際関係学部は、20年の節目を迎え、次の新たな時代へむかって歩みはじめました。これまで巣立っていった卒業生は、約3,800名。設置時から今日まで、教育に携わってこられた多くの先生方、サポートしてくださった事務職員の皆様、そして何より、国際関係学部の教育理念をしっかり受けとめ、東松山キャンパスで学んできた卒業生と在校生に、心から感謝の意を表します。

「東西文化の融合」を建学の精神とする本学にあって、国際関係学部は、アジアに軸足をおいた教育と研究を行ない、アジアへの豊かな想像力と理解力をもって、日本とアジアの人びとの相互理解と友好の促進に貢献できる人材を育成することを教育の目標にしてきました。日本国内で、そしてアジアの各地で働いている卒業生たちをみると、その職種や活動分野はまことに多種多様なものがあり、国際関係学部の教育のひとつの到達点がみえてきます。記念誌に収められた卒業生たちの文章からもそれはうかがえるでしょう。

ところで、文部科学省による2006年度「特色ある大学教育支援プログラム」に申請していた本学部の『アジア理解教育の総合的取組』が、このたび採択されました。少子化の影響で大学を取り巻く環境が厳しさを増すなか、すぐれた教育実践を選定し、財政支援を行なうとともに、選定された取組を広く社会に情報提供することで、大学教育の改善をはかろうという趣旨で始められた本プログラムには、今年度、全国331の大学が応募していますが、私たちは「アジア地域言語教育」「地域研究カリキュラム」「現地体験型学習」「学生による企画・参加・実行型の活動」の4つの柱で行なってきた学部教育の実績をもとに、応募したのです。20周年という節目の年に、アジアに軸足をおいて積み上げてきた国際関係学部の教育が評価されのは、実にうれしいことです。

とはいえ、これからさらに20年先、30年先を見据えたとき、大東文化大学と国際関係学部が社会的に意味のある高等教育機関として生きていくためには、なお多大の努力が求められています。私たちが20年間に積み上げてきたものは、すでに「伝統」といってよいでしょう。しかし伝統とは、常に変化しながら再創造されていくものです。そしてその変化の道筋は過去の歴史をたどることからみえてくるでしょう。未来は過去のなかにしかないからです。この記念誌が、国際関係学部の20年の歩みをふり返ることによって、未来への確かな礎になることを願っています。

現役と卒業生をつなぎたい

国際関係学科　学科主任
教授 新納（にいのう）　豊（ゆたか）

20周年という節目に学部の「来し方、行く末」を考えることは、同時に、この20年というものが卒業生のみなさんそれぞれの「人生の一コマ」によって織りなされていることに思いをいたすことでもあります。1988年夏、オリンピック開幕直前のソウルに降り立った第1回韓国現地研修団の14人、今でも「幻の卒業式」と語り継がれる1990年東松山校舎での第1回卒業式、また当日オーバーブリッジでの「学科対抗綱引き大会」を実現させた勝手連の5人、こうしたシーンが次々にフラッシュバックしてまいります。

みなさんが今何をしているのか、これを現役学生に伝えるために昨年から卒業生を大学に招いて話を聞く「大学デビュー・プロジェクト」を始めました。現役の学生にとって、卒業生は最も身近な自分の未来なのです。

また、現地研修参加者も今年度でのべ3500人を超えています。これだけの人数を東アジアから西アジアまでの広大な地域に送り出してきました。1カ月程度ではありますが、観光でない日常空間での一カ所滞在型の現地体験は、いまだ十分とは言えない日本社会のアジア理解において貴重な資産でもあります。20周年を機に卒業後のネットワーク作りを進め、こうした資産の有効活用も図りたいと思っています。

「20年の経験」

国際文化学科 学科主任
教授 田辺（たなべ）　清（きよし）

国際文化学科は文化・歴史・芸術などの人文科学の分野からアジアにアプローチすることを目的とし、欧米もふくめたグローバルな視野を養うことを基本理念としてきた。本学の学生たちと接するようになって、ちょうど20年。私のもとには多くのユニークな人間たちが教室や研究室に集まって数年間をすごしたあと、それぞれの地へ巣立っていった。全部で200本近くを数える彼らの「卒業論文」のテーマも美術、音楽、映画、ファッション、舞踊、料理そしてスポーツに社会問題と実に多岐にわたっている。その一本一本に思い出があり、その一文字一文字から学生たちの姿までが蘇ってくる。「卒論」だからといってかみしもを着たようなものではなく彼らの真実の姿がその行間から辿れるからだ。

これからも国際文化学科をはじめとする本学部生には、その素直な感性を生かして、さまざまな「経験」を積んでいって欲しい。多くの失敗と挫折を繰り返した「万能の天才」レオナルド・ダ・ヴィンチのように「経験」の積み重ねを糧とし、それぞれの夢を紡ぐために…。

●国際関係学部20周年記念座談会

「我々が歩んだ20年とこれから切り拓く未来」

座談会

1986年の学部開設から20年……。
国際関係学部が歩んできた軌跡と今後の展望について、担当教授、学部卒業生、在校生の皆さんに楽しく語り合っていただきました。

■日　時／2006年6月17日
■場　所／東松山校舎　管理棟3階 応接室
■出席者／**新納 豊**教授、**E.マーゲル・Jr.**教授、**片岡弘次**教授、**樋口桂子**教授、**福来順子**さん（旧姓・藤田）、**吉野航太**さん、**舘野麻未**さん
［文中では在学当時の旧姓を使用しております］
司会：**押川典昭**教授

「国際関係学部」の誕生

押　川　「今日は20周年記念誌のための座談会ということで、卒業生2人、在校生1人、それから先生方4人にお集まりいただいて、20年間の学部の歩み等々、お話をお聞かせいただきたいと思います。20年というのは生まれた子供が二十歳ということですので、人生において非常に大きな節目ですが、大学にとっても学部にとっても20年は大きな節目になるでしょう。国際関係学部ができたのは1986年ですが、それがどういう年であったかといいますと、1月28日にスペースシャトル・チャレンジャーの爆発炎上事故があったんですね。それから、2月にはフィリピンでマルコス大統領が倒されて、アキノという女性の大統領が就任しました。4月1日には男女機会均等法が施行になっています。それから、4月26日にはチェルノブイリ原子力発電所の事故が起こっています。6月にはメキシコでサッカーのワールドカップが開かれて、マラドーナの活躍でアルゼンチンが優勝しています。その他、流行語大賞というのがたぶんこの前後から始まっているんですが、この年選ばれたのは、『新人類』という語なんです。1986年はそんな年でした。それから20年の間にいろんなことがありましたが、世界史的な出来事としてはベルリンの壁の崩壊などは大きな出来事ですね。では、先生方からお話を伺いますが、最初に国際関係学部に赴任された頃のことについてお聞かせ下さい。まず片岡先生からお願いします」

片　岡　「私は一番初めからきているんですよ。1986年つまり昭和61年の2年前の5月でしたが、当時私は大阪の定時制高校に勤務してまして、昼は大阪外語大で教えていたんですが、朝の10時くらいだったかな、電話が入ってきて、その時から話が始まりました。ちょうど

PROFILE

押川典昭（おしかわ・のりあき）
わたしは文学研究者だから、言葉に強い関心がある。研究は「ネイション」（国民）意識の誕生に文学がどうかかわってきたのかを東南アジア文学で考えてみることである。

PROFILE

片岡弘次（かたおか・ひろじ）
生まれ育った所は高坂から遠くない小川町です。ゼミではインドやパキスタンの詩や小説を読みます。将来、H賞や芥川賞などを取る人が出ることを希望します。

PROFILE

新納 豊（にいのう・ゆたか）

歩き回り、泊り込んで飲んだり食ったりすることが大好きです。今は「定期市」と「朝鮮牛」をキーワードにして歩いています。夢はわが家にナンを焼くかまどを作ることです。

２年弱かかりましたよ、1986年の入学式までに。何回か会議がありまして、教員は確か関係が11名、文化が８名くらいいました。そして、マーゲル先生なんかの教養課程に６名いました。だから、第１年目は19名と６名の25名の体制で始まったと思います。地域言語は秋から始まるということで、学生の地域言語の選択は７月でした。その選択のため嬬恋で６月に学生全員が合宿をすることになりましたが、その下準備に新納先生と篠田先生と中堂先生、それに大野先生が行かれました」

押　川　「新納先生、当時の状況について何か」

新　納　「私も１年目から来たんですけども、最初の１年間は私の担当の授業が全くなかったので、学部運営のプログラム作りをやってました。カリキュラムはもうできてるんだけれども、どうやって実施するのかということが入学後に始まったわけですから。合宿をやろうかとかいろんな提案をして、料理祭の真似事みたいなものを秋口にやったりとか、つまり試行錯誤で、１年目は。私は授業はなかったけれど、随分忙しかったような気がします。でも、今と比べりゃ牧歌的なもんでした」（笑い）

片　岡　「委員会はなかったですよね」

新　納　「委員会はまだ何も発足してなくて、こうやれ、ああやれってのがあればさっと動きましたから、意思統一とか会議なんて必要なかった。ここは俺が適当にやっとくからそっちは頼む、みたいなことでね」

押　川　「このキャンパスはその時にだいたいこのかたちで？」

新　納　「いや、できあがってたのは半分くらいですね。七号館はできてなかったし、六号館はまだ工事中。一番奥の第二研究棟が一応できあがって、八号館ができてた。あとは、芝生もはってなくて、ほこりだらけ、真ん中のブリッチはできてましたよ」

押　川　「図書館は？」

新　納　「図書館はまだ工事中だったと思います。向こう側の体育館とか記念講堂は一応形はできてましたね。まだ、タイルは貼ってなかったけど」

片　岡　「我々が入ったときは、今の研究棟は半分しかなかったんですよ」

新　納　「そうそう、国際の方しかなかった」

押　川　「マーゲル先生の印象はいかがでしたか」

マーゲル　「私は東京で９年間くらい英語教育関係の会社に勤めてました。だから、こちらの印象は、

PROFILE

E.マーゲル（エドワード・マーゲル・Jr.）

アメリカでの学生時代、日本が大好きで日本のことなら何でも勉強しました。人間活動は複雑で創造的です。私は学生から学ぶことに最も関心があります。

田舎だな。自然は豊富で良かったんですがね。仕事の面では東松山英語部会というのがあって、これが結構忙しかったんですよ。英語のカリキュラムどうすればよいかとかね。その頃は学部独自にやるんじゃなくて、何でも全学的にやってましたから、時間がかかるんです、合意ができるまでに。だからタテ割りになった時、私はとっても嬉しかったですね。でも、やっぱり田舎だったな、田舎（笑い）。駅の周り、なにも、一つもないんですよ」

新　納　「駅がね、板作りのね、板張りの駅で。はじめは向こう側にしか出口がなかった。バスも向こう側から出たんですよ。こっち側は道路なかったんだから。田んぼしかなかった」

片　岡　「4月7日にこっち側の道路が開通したんです。国際の入学式が4月16日だったと思います。だから、あの道は国際用の道路なんです。高田博厚という人の彫刻があってね。いや、それも最初はなかったですね」

押　川　「国際はこの大学の5番目の学部で、今は8学部ですが、その当時は学生数はずっと少なかったわけですね、東松山は」

新　納　「5,000人と聞いてましたよね、だからそれほど極端では。今は6,000人とかでしょ、1,000人ぐらい少なかった」

片　岡　「倍率は高かったですよね、入学試験の（笑い）。200人くらいのところに、たしか3,000人超えてたんじゃない、国際の受験生は」

マーゲル　「いろいろ不便だったでしょ、学生は、当時は」

新　納　「下宿とかね。学生委員とかなかったけども、お前は学生のこと考えろって言われてたので、学生の下宿とか全部歩いたですよ。『ここいくら』とか『おまえのとこ風呂ついて無いやん』とか（笑い）、そういうのやってました、当時」

押　川　「樋口先生は何年目からですか」

樋　口　「私は2年目からなんです。87年」

押　川　「87年ですか。新入生が2年生になったんですね。どんな印象」

樋　口　「やっぱり田舎だなぁと（笑い）。当時の学生はのんびりしてるっていうか、今とは随分雰囲気が違いましたよね」

片　岡　「車が通ってなかったよね、今みたいに」

新　納　「まだ、ニュータウンが完成してなくて、バスの本数も少なかった」

樋　口　「学バスは駅前からいつでも乗れたんですよ、朝の1限目の前もね。今はかなり歩かないとダメですが」

PROFILE

樋口桂子（ひぐち・けいこ）

寓話・神話・物語の構造研究をしています。最終的には動物寓話の構造を体系化したいと思っています。趣味は山歩きです。

PROFILE

福来順子（ふくらい・じゅんこ／旧姓・藤田）

国際文化学科卒業後、現代アジア研究所勤務を含めて、大学には7年間お世話になる。その後、精神科診療所勤務を経て、現在は主婦。

「国際関係学部」で学ぶ

押　川　「それでは、卒業生のお二人にお伺いします。藤田さんは何年の入学ですか」

藤　田　「1988年の入学で、第3期生です。昭和最後の学籍番号です。芝生も生えてましたし、校舎が一通りできていて、高坂駅前もすごくきれいだったのを覚えています。一通りいろんなものが出来上がった年かなと思います」

押　川　「地域言語は何でした？」

藤　田　「私はヒンディー語を専攻してました。先程、片岡先生や新納先生がおっしゃってたような、私たちの代かその次くらいまで、入学してすぐに嬬恋で合宿があったんですね。それで、いろんな先生と交流して、言語を何にしようか決めていました。夜中にみんなで遊んだりして、片岡先生が踊りながら同級生をクルクル回していたのはよく覚えています」（笑い）

押　川　「その時は入ってすぐに地域言語を選ぶんではなくて…」

藤　田　「はい、9言語見たときに何が何だかまだわからない。言語の授業は後期から始まるので、それまでに先生方や、1期生、2期生という先輩たちからもいろいろ情報を貰って、みんなと相談して決めるという感じでした」

押　川　「国際関係学部という名称ですけれど、こういう学部ができたのは全国の大学で3番目らし

PROFILE

吉野航太（よしの・こうた）

渋谷で働くベンチャー社員。在学時代、講義ではなく、地研会館の皆勤賞を受賞。仕事は順調だが、人生のセカンドステージはいまだ訪れず。

いんですね。最初が日大の国際関係学部、その後はちょっと忘れましたけども、大東文化大学の国際関係学部は全国の大学の中で3番目にできたようです。したがって、国際関係学とか国際関係学部というのは高校生にあまり馴染みのなかったものだろうと思います。藤田さんはこの学部に入ってくる何か動機みたいなのありますか」

藤　田　「その当時、大東の国際がアジア教育を売りにしていて、国際関係学というとかなり漠然としていますが、アジアのことを専門的に勉強したかったので、こちらを選びました」

押　川　「アジアに重心を置いた学部であると十分伝わっていたのですか」

藤　田　「はい、それは」

押　川　「吉野さんは何年に入学したのですか」

吉　野　「ちょうど藤田さんの10年後ですね。1998年の入学です」

押　川　「それはどんな時代？」

吉　野　「僕らが物心ついた頃には湾岸戦争があって、その後中国が伸びてきて、アジア経済の台頭とか、日韓の問題とか、それらを吸収して大東の国際を選んだから、多分正解なのかなっていうのはあるんです」

押　川　「それは非常におもしろいですね。つまり、ある時期までアジアというのは貧しい世界だったわけですね。豊かな世界と貧しいアジアという位置づけだったんだけども、吉野さんなんかの世代にとってのアジアってのは貧しいだけのアジアではなかったのですね」

吉　野　「そうですね、ちょうど変りつつあるところ。高校から大学に入って視野が広がるところと、これからアジアの時代だっていうところがオーバーラップしてアジアに関心を持ったんだと思うんですよ、僕なんかの世代は」

藤　田　「たぶん私の世代は、アジアの情報があまりなくて、ミステリアスなものを求めたり、映画を観たり本を読んだり、そういう文化的な側面から大東を選んだ人が多かったんじゃないかなと思います」

吉　野　「僕らは文化的な面からではなくて、国の経済発展とか国家とかから入ってったのかなぁ。で、入学してから先生方のお力で、文化とか社会とかの方にだんだんとシフトしていったのかなって思うんですけど」

押　川　「そういうアジアのイメージですね。我々の世代でいうとベトナム戦争というのは非常に大きいですね。ところが、吉野さんの世代はベトナム戦争はとうの昔に終わっていて、中国が大きく変りつつある時代。我々にとって中国は社会主義の国であったわけですが、吉野さんの世代にとっての中国はもはや社会主義体制の国ではなくて、経済的発展を遂げつつあるアジアの大国という感じですか」

吉　野　「そうですね、大国であり、なおかつこれから躍進しそうな国っていうイメージがあったと思います。中国だけじゃなくてNIESとかアジアの他の国々もそうだったと思うんですよ。やっぱりこれからはアジアの時代なんだなと、多分マスコミなんかもいろいろ言ってたから、そういうのを刷り込まれてたのかもしれません」

マーゲル　「ちょうど新しい世紀になったときに通ってたんですね、学校に。なにかありましたか、新しい21世紀になったっていう、何か」

吉　野　「ちょうど僕なんかが入学した頃に通貨危機が起こってアジアの経済がいったん停滞したんですね。それまで躍進する地域っていうイメージだったんですが、逆にそこでちょっと冷静になれて、国際関係論を学ぶ上では退屈しなかったです」

押　川　「舘野さんは何年？」

舘　野　「私は2003年入学です」

押　川　「それはどんな年でしたか」

舘　野　「私が高校2年生のときにアメリカで同時多発テロがあって、飛行機が突っ込んで、それ

PROFILE

舘野麻未（たての・まみ）

現在、国際文化学科4年です。入学以来、アジアがますます好きになり、アジアに惑わされています。アジアに手招きされると、ふらっと一人で旅に行きます。今後もアジア人として、パワフルに生きていきたいです。

で修学旅行はほとんどみんな延期になったんですね。そういう年で、なんかあるぞっていう、その衝撃は忘れられない。世界は今どうなってるんだろうっていうのが、とても気になってました」

押　川　「それでこの学部で何を学ぼうと思ったのですか」

舘　野　「私は漠然と世界のことを知りたいなということでここに入りました。外国の文化とかを知っていけば、世界の人とみんな仲良く生きていけるんじゃないかって当時は思っていました。文化とか言語とか宗教とか学べば別に飛行機突っ込まなくても、もっとみんな仲良く笑って暮らせるんじゃないかって」

地域研究学会とアジアミックス

押　川　「今までの三人のお話でも、この20年の間に世界やアジアが大きく変ったことが伺えますが、では、この大学あるいは学部でどういう変化があったか、何が変って、何が変らずにきたのか、そのあたりを、片岡先生から。大学で20年間教えてこられて、学生の気質とかそういうものも含めて、変わってきたものってありますか」

片　岡　「だから、国際って言えばまず地域研究学会というかな。藤田さんなんかが入ってきた頃かな、天安門があっのは」

藤　田　「天安門は私が入った後です。89年6月。小島先生が急遽授業で取り上げたり、中国の留学生が集会をしていたのを覚えています。」

片　岡　「それでね、エスニック料理祭あるでしょ、あれをそんな時すべきかどうか問題になったんですよ。中国がそういうふうなときに…」

新　納　「お祭り騒ぎでいいのかという、ごくまともな発想が出てくる…」

押　川　「ちょっとその前に、今年、アジアミックスが19回目ですね。学部の歩みとほとんど同じ

ということで、その経緯というのを誰か」

新　納　「あの当時、2年目に、文化学科主任だった大野先生が高坂駅の線路の向こう側に下宿を構えたんですよ。三階建てのアパートの二階。そこで留学生なんかもよく集まって、料理を作ったりしてたんだけど、これ学校でやろうよという話になって。第一回目をやったのは秋だったと思うんですけど」

片　岡　「今、学科事務室があるあたり」

新　納　「でも、第一回目というのは幻なんですよ。数えられてない。あれは大野先生の台所から運んだんですよ、鍋を二つ作って。アジミ(アジアミックスのこと)は翌年から始まったんです」

片　岡　「古海さんが今いらっしゃる部屋はもっと小さかったんじゃなかった？」

新　納　「あそこに電熱器いれてね。それから翌年に初めてやった。で、モロヘイヤっていうのはあの時初めて食べた（笑い)。あれ以来未だにモロヘイヤ出すんだからね。うまかないのにさ」(笑い)

押　川　「キャンプラ(キャンパス・プラザ)でやるようになったのはいつから？」

藤　田　「私が2年生の時はまだ、進明堂、本屋さんの上で」

片　岡　「あれは違う、あれはダンスパーティー。『あなたに狂う踊りの夕べ』とかいっちゃって」

押　川　「模擬店みたいなのを作って学生に振舞うという今の形が整ったのはいつごろ？」

新　納　「4年目だと思いますよ。3年目に組織作りをやったんです、1988年に。ちょうどその年に初めて現地研修に出発したんですけど、3年生がね。その時に出発する時に僕が宿題を置いて出発した記憶が残ってんのよ、『これやっとけ』って。で、篠田先生がイヤァな顔したのをまだ覚えてますよ」(笑い)

片　岡　「地域研究学会ができたというのは、ほら、学生からお金を集めますよね、年に2千円、4年で8千円。それで、当時の学部長の大野先生がおっしゃるには、他の学部はそのお金で紀要を作って部屋の中に置いとくから、その8千円は学生に還元されない。教員が書いたものなんか、後になるとゴミ同然だって」

押　川　「今でもそうですね」(笑い)

片　岡　「国際の中で学生と教員で何か作った方がいいんじゃないかということになって、教員8名、学生8名で組織作ったんです」

押　川　「それが地域研究学会？」

片　岡　「そう、地域研究学会。その中に研究班をいろいろ作り、それぞれ５万円ぐらいずつ予算を付けた。エスニック料理祭では実行委員会を組織したわけです」

押　川　「藤田さんはそういうのに関わった記憶はありますか」

藤　田　「私は直接的にはないんですけど、まわりが動いてて、先輩達が組織を作って、何でも手作りなんですけれど、そういうのが見られておもしろかったですね」

新　納　「３期生ぐらいから学生のまとまりがでてきたんですよね」

藤　田　「はい、そうですね。１期生が案を作って引っ張って、その下で動くのが２期生。私達３期生は下っ端みたいな、下っ端の世代」

新　納　「当時はね暴走族がまだ流行しててね。うちにもエンペラーが何人もいたんですよ。それがなかなかよく活躍したんです。だから、初期のね、地域研究学会のしぶとさっていうのは、暴走族なんだよね。『中国でこういう事態が発生してるのに遊んでちゃいかんだろ』ってエンペラーが言いだしたんだよね」（笑い）

押　川　「説得力あるな。舘野さん、エンペラーってわからないでしょう」

舘　野　「え、始皇帝？」

押　川　「いやいや、エンペラーって、昔有名な暴走族グループがあったの」

新　納　「いろんな支部があって、ここが埼玉支部で。」

マーゲル　「そのへんうるさかったですよ。」

新　納　「夏になるともう、この峠のところが、今はきれいな道になったけど、あれグニャグニャだったんで、あれが楽しくてみんなやって来るんだ」

押　川　「それが天安門のような事件が起こってる時に遊んでる場合かって、アジアと結びつくのが実におもしろいね」

片　岡　「それでね、地域研究学会が進んでいくにつれて、総会がまだ開かれてなかったんですよ。で、そのきっかけっていうのが、語学の選択で嬬恋に行ってたとき、地域研究学会で活動している小南君とか葛城君とかのグループが来て、ちょっと、来てくださいって。行ったら学生が７、８人いて、机ずらっと並べて、先生座ってくださいって。我々、地域研究学会でやってるんだけれども、総会がまだ一回

も開かれてない、これはどういうことなんですかって。いや、元気ありました。それでそのときに、『なんとか状』を私に寄こしたんです。これで考えてほしいって。たしか葛城くんの名前だった。それから地域研究学会の総会が開かれるようになったんです。とにかく元気があった」

現地研修

押　川　「さっき話の中に出てきた現地研修ですが、どういうことで現地研修がカリキュラムの中に組み込まれたのか、誰かご存知で」

新　納　「いや、それは最初から組み込まれてたんですよ。ここに赴任した時に一番最初に受け取った書類の中に、私の場合はもう、あなたは韓国担当なんだから韓国の提携校を探してくださいという紙が入ってましたよ。」

押　川　「実際に始まったのは何年目から。」

新　納　「実際には、だから３年生が行ったわけですから、88年が第１回」

押　川　「カリキュラムの中でどういう位置づけだったんでしょう」

新　納　「大野先生の話ではあれは素人が作ったからできたんだと。プロだったらこんな発想なかった、こんな無謀なことやんないよねって（笑い）、嬉しそうな顔してたけれど、こっちは走りまわされましたよ、交渉はどうするって」

押　川　「確かに素人が作ったというのはわかりますよ。それで、現地研修は学生にどういう効果を持つと期待されてたんでしょう」

新　納　「やはり、行けば刺激になるという、行ってから始まるんだというんで、３年ってのは遅すぎるという議論は最初から出てきたんですよ」

押　川　「２年生が行くというふうになったのはいつから？」

新　納　「第１回のカリキュラム改定後だから…５年目か６年目ですよ」

押　川　「新納先生と片岡先生はアジア研究者だからともかく、樋口先生は東南アジアに学生を連れて行くなんていう経験は・・・」

樋　口　（笑い）「まったくないんです」

押　川　「そういう先生がアジアに学生を連れて行くというのはどんな感じ」

樋　口　「個人的にはエジプトも行ってたし、あちこち行ってましたけど、最初の就任の時の条件で、これ絶対に行って下さいって。そのときはどうしようかと思ったんですけど、まぁなんとかなるかなって。で、私が一番初めに行ったのはパキスタンだったんですけども」（笑い）

新　納　「よりによってね」

樋　口　「そうなんです。どうしてパキスタンに行くことになったのかというと、本来行くはずのイランが戦争状態で、それで結局パキスタンになったのです」

押　川　「イラン・イラク戦争がまだ続いてたの？」

樋　口　「はい。パキスタンのカラチ大学のペルシア語科に頼んで、パキスタン組と一緒に行ったんです。もうお辞めになった柳沢先生がパキスタン組を20人ぐらい、私がイラン組を10人くらい連れて、30数名の大所帯でカラチ大学に行ったんです」

押　川　「カラチ大学でペルシア語の授業を？」

樋　口　「そうなんです。ところが実はパキスタンも相当危なかったんです（笑い）。宿舎のホテルからカラチ大学までバスで行くんですが、厳重に警護されていて、大学の構内に入ったら絶対に学校の外に出るなと。授業の後もどこに行くのもみんなバス。ご飯も全員そのバスで行って食べて帰ってくる。一人での外出は禁止というふうでしたね」

押　川　「マーゲル先生はどこに行かれたのですか、最初は」

マーゲル　「1989年にインドネシアに行きまして、記憶に残ってるのはホテルですね。ホテルはアングレックホテルといって、バンドンにあるんですけど、汚くてゴキブリいっぱいいるんです。学生がね、廊下にゴキブリレースコース作るわけですよ（笑い）。お金を賭けてたかどうかは知らないけど。あまりにも汚かったから、日本に帰ってきてすぐ、来年違うホテルにしろと頼みました。現地研修の最初の思い出がゴキブリっていうのはちょっと何ですが、僕は生き生きとした気持ちで行って来た

んですよ。学生と一緒に行きたくて、自分にとっても新しい経験になると思って。だから、現地研修っていうのはほんとに楽しい経験です。それから教員が学生の立場に立たないといい現地研修はできないと思うんですよ。学生と同じ精神で行ってこようっていうのは大事じゃないですかね。そして帰ってきたらその現地研修のクラスの中にその国に留学する学生がいるから、そのために行ってると思うんですよ。刺激を受けてこの国にまた行って来いって言うんですよ、僕は」

押　川　「藤田さんは現地研修は何年ごろですか」

藤　田　「当時は必修で、1990年。今は別のところだと思いますが、その頃はインドのアラハバードというところに行ってました。3年生になって初めて現地研修に行って、地域言語も英語もちゃんとやっておけばよかったと思いました。現地研修が2年生になると聞いてその方がいいかなと思ってました」

押　川　「現地研修に参加するということは、アジアとの関わりのターニングポイントになるという、そんな感じがしましたか」

藤　田　「そうですね、その頃は現地研修が初めてのアジア体験という人が多かったと思うんですよね。しかもグループで行って。個人では行けないような大学や施設を見学したり、大使館の方のお話を聞いたりしましたが、そういうことがとても興味深かったですね」

押　川　「吉野さんはどこ行ったの？」

吉　野　「北京大学。楽しかったです。ちょうど99年に行ったんですよ。中国建国50周年の節目の年で・・・。やっぱり当時中国伸びてて、北京大学の周りも高いビルがどんどん工事中。大学の周りでご飯とか食べるんですけど、もうここの店来月でおしまいだって。なぜって聞くと、でっかいビルが建つからって。中国が急激に変わる時期に行って、中国のエネ

ルギーを感じたっていうのはすごく大きなことですね。夜出歩いていると、ちょうど50周年のパレードの演習をやってて、地下鉄もバスも止まっちゃうから帰れなくて、しょうがないからそのまま繁華街の居酒屋で朝まで飲んで、そういういい思い出はあるんですけど(笑い)。焼き鳥屋とか小龍包屋で朝まで飲んで、8時から授業に参加するみたいな、そんなむちゃくちゃな現地研修で、怒られたんですけど・・・」

押　川　「舘野さんはどうですか？」

舘　野　「私は現地研修は行ってませんが、留学をしました。2005年から今年の3月まで」

押　川　「どこに？」

舘　野　「インドのジャイプールです。いろいろ大変なこともありましたが、現地研修の提携校なので先生方は大東のこともご存知で、そのあたりは楽だったかなと思います。あとは、今年の2月に2年生が現地研修に来たとき一緒に行動したので、自分も現地研修に行ったような気分になりました」

押　川　「現地研修に参加した人数を調べてみますと、去年2005年度までで3,373名なんです。この3,373名がさしたる事故もなくやってこれたというのは、やはり引率の先生達の苦労も大変なものがあったと思いますね」

新　納　「何回か放り出そうとしたことあるね(笑い)。もう、こいつら置いて俺だけ帰ろうかと」

押　川　「そのあたりのこと、樋口先生、何かありますか?」

樋　口　「ありますよ。パキスタンに行った時ですが、8時間ぐらいかかって着いたら夜中すぎてたんですよ。それで、予約しているはずのホテルに行ったら、全室満員なんですよ(笑い)。それから空いたホテルを探し回って、やっと泊まれるホテルに着いたのが夜中の3時ですね。で、学生をそれぞれの部屋に割り振って、

寝られたのは大体4時。すぐに6時に起きて、つまり8時くらいに大使館に行く予定が組まれていたので、あれは大変でしたね。とにかくその手の騒動はいっぱいですよ」

押　川　「マーゲル先生は？」

マーゲル　「やっぱり、一昨年の上海の現地研修。44人だったから。そして4週間が5週間になったんですけど、それは1人の学生が帰る前日に自分の貴重品をパスポート含めて盗られちゃったんですよ。それで私はほとんど眠ってないですね、その5週間。44人だったから、毎日病人が出て、特に2、3人の女子学生が点滴とか栄養剤とかいろいろやってましたけども、なかなか治らなくて。それで、僕はすごく生真面目ですから心配で心配で眠れなくなるわけですよ、その学生のことを考えてるから。だから日本に帰ってきて、あんな疲れたの初めてですよ、人生で」

押　川　「新納先生、何かこれはちょっとまいったなということありますか？」

新　納　「一回だけね。ヴェトナム引率で帰ってくる時、ヴェトナム・エアーがオーバーブッキングしちゃったんですね。こっちはリコンファームまで全部してあって、それをしてないって彼らは主張したけど、してる書類が出てきちゃったんだよね。ハノイの大学が手続きしてたわけだけど、社会主義だから、国家大学っていったって、空港のマネージャーの方が格が上なんで交渉にならない。これは自分で交渉するしかないと判断してね、学生にこれからここを占拠するぞって(笑い)、ヴェトナム・エアーの事務所。学生が占拠ってなんですかというから、とにかくお前らここに居て立ってろと、ニコニコしちゃいかんとか言って(笑い)。そしたら同じような目に遭っていたアメリカ人とかカナダ人とかが数名いてね。そのアメリカ人がよく知ってて、ビエンチャン経由でバンコクに行ける飛行機がありそうだと言うんですね。こっちはちょっと精神的に危うくなってる女子学生を抱えてたんで、早くヴェトナムから出て、タイあたりまで行けば何とかなると思ってたから、とにかく出ようと。ヴェトナム・エアーはビエンチャン行くならその便に乗せる手配はするけど、そっから先は知らんという話で。で、ビエンチャン着いたら、何でお前らここに居る

んだって話になるんだよね。まぁラオス・エアーのおばちゃんの機転でとにかく最終的には解決したんだけれども。で、ようやく空港の職員を説得して、さぁ行くぞって振り向くと学生がいない。『どこ行った』って言うと、『珍しい飛行機があるというんでみんな向こうに写真撮りに行きました』（笑い）とかさ。こっちはもうハラハラドキドキで、下手すりゃビエンチャンに足止めでね、ラオスにあいつ何しに行ったんだって（笑）」

押　川　「いや、その当時ね、ラオスのビエンチャンに行く日本人なんてごくごくわずかで・・・それで、どうやって帰ったの？」

新　納　「最終的にはビエンチャンから、バルカン・エアーに乗っかって」（笑い）

押　川　「何エアー？」

新　納　「バルカン航空（笑）。リースのバルカン航空がラオスからバンコクに飛んでた。結局バンコクには5時間遅れで着いたわけですよ。で、そのときに僕がちょっと嬉しかったのはね、もう夜遅かったんだけど、ホテルまで行くときに、もう12月に入ってて、バンコクはライトアップするんだよね。木に豆電球を付けて、クリスマスの飾り。空港から街中に向けてずーっと。それでね、皆ワーワー喜んでたんですよ、最初のうち。そしたら急に静かになった。どうしたんだって言ったらね、『ベトナムが恋しいです』って（笑）。ベトナムは夜は真っ暗なの。もう8時過ぎたら、とにかく街中真っ暗だよ。僕は学生を『お前ら暗いからといって怖がんな』と言っていつも引っ張り出してたけど、それでも本当に真っ暗で、電気そのものがね。それでおかしくなりそうなのもいたんだけども（笑）。それがバンコクでね、『今はじめてベトナムを愛おしく思ってます』ってね、それが俺は嬉しかったんだよね。そうだ、こいつらチャラチャラやって、よっぽどもう置いて行こうかと思っていたけど、あぁそういうことがあるんだと思ってね」

スピーチコンテスト

押　川　「では、話題を変えまして、この4月に、文部科学省が募集した『特色ある大学教育支援プログラム』に国際関係学部が『アジア理解教育の総合的取組』という名称で応募しているんですが、その中に四つの大きな柱があります。一つはアジアの地域言語教育。二つ目は地域研究カリキュラム。例えば東アジアの歴史であるとか経済であるとか、その地域に密着したカリキュラム。三つ目は現地体験型学習。これは端的には現地研修と、そのあとにある留学ということですね。四つ目が学生による企画・参加・実行型の活動。これは大学が設定してるカリキュラムの外にある学生の活動ということで、地域研究学会の活動、Asia Mixなどが入るわけですね。この四つ目の、学生による活動の中で大きな柱に成長してきたのがアジア言語によるスピーチコンテストです。これは藤田さんの時代にはまだなかったんですけども、1998年から開かれて、今年が9回目になります。これはあとで吉野さんにお話を聞きたいと思いますけど、1998年に、当時の小島麗逸学部長から、どうも地域言語が教室だけの勉強になってるので、何か学部にふさわしい、教室外の活動を立ち上げてくれないかというふうに言われまして。そこで、アジアの言語によるスピーチコンテストがそのひとつかなぁと思って。その当時、確か2年生だったと思うんですけども・・・吉野さん1年生だった？」

吉　野　「1年生でしたよ」

押　川　「すごいなぁ、1年生。吉野さんと、それからもう1人、内野さんですね」

吉　野　「内野がやったんですよ」

押　川　「片岡先生はその2人にどういう経緯で話を持ってったんですか。小島先生から話があった？」

片　岡　「なかったです。その発端は3月の懇親会の帰り、服部先生がよく行っておられたアトリエっていうお店に服部先生と何人かで行ったわけ。石田先生と広瀬先生とそれに私の3人で、『なんかしない？』ってことになって。それでスピーチコンテストってどうだろうねっ

てことになった。それで地域研究学会に持ってったら、阿部君や姉崎さんがいたんだけど、はじめのうちあんまり乗り気じゃなくて。夏休みの前に運営委員会で何回か話したんですけど、どうなるかなぁって思ってたわけ。そしたら秋口になって、全体の動きが出てきて、形ができたんですよ」

押　川　「地域研究学会に話がきた時、吉野さんはそこにいたの？」

吉　野　「僕はいないですよ。地研(地域研究学会)で話があったとき、当時の阿部さんとか姉崎さんはあんまりやる気じゃなかったんです。そしたら、僕の友人の内野が、誰かがやらなきゃいけないだろうって話になって。そしたら姉崎さんがウッチー（内野）に『イベントをやると、女の子にもてるよ』って言ったんすよ。そしたらウッチーが『やる』って言い出して（笑）。でも結局、10月か11月か、代表は決まってるけど、実際にイベントって『何をやればいいの？』ってなって。当時、僕はAsia Weekの催しをやってたんですけど、ウッチーに『ちょっと助けてくれよ』って言われて、立看板作ったり、当日のシナリオを作ったりしたのが、僕のスピコン(スピーチコンテスト)との関わりの最初。だからスピコンに関わったのは本番の１週間ぐらい前からだったんです」

片　岡　「あの時に学生は凄いなぁと思ったのが、進行表があるでしょ、あれを見たんですよ、舞台の上で、本番の前日、私は。進行を全部想定して、この次はこれ、その次はこれって書いてある。鉛筆書きだったけど」

吉　野　「鉛筆書きでした」（笑い）

押　川　「あのときは、僕の記憶では、出場者全員が壇上の椅子に並んで座っていて、順番がくると前に出て行ってスピーチをするというやり方だった」

吉　野　「のど自慢スタイルでしたね」（笑い）

押　川　「だけど準備期間はそんなに短かった？ 僕は何回か打ち合わせしたという記憶があるよ。」

吉　野　「打ち合わせは確かに。ただ作業は本当に１週間かかってないですよ。進行もはじめの挨拶があって、スピーチがあって、表彰式があってっていうような、特に難しいことはやってなかったですね」

押　川　「その後、吉野さんは総合プロデューサーとして２回関わったわけですが、ちょっとそのあたりを」

吉　野　「第１回がけっこう盛り上がって、第２回もやらなきゃいけないっていうので、『じゃぁ僕やりますよ』って言ったんですけど。第２回は第１回とそんなに変わってはいないんです。１年生の岩倉祥光君とか鈴木佑輔君とかの意見をいろいろ入れてくと、コンテンツが充実して、第３回で一気に広がって、それが今のスピーチコンテストのたぶん原型になってると思います。第３回でいろんなものを取り入れたんです。前座とか、英語とか、音響とか、照明とか。語劇もあるし、スピーチももちろんですけど。僕らもともと何も持ってないですから、2000年の夏に外大に行ったんですよ。外大の語劇祭の実行委員会に。そこで実行委員長に『なんでこんなに盛り上がってるんですか？』って訊いたら、その実行委員長が、『やるのが当たり前になってる。だからみんなで盛り上げるんだ』ってことを言ったんですよ。やっぱり、うちもそういう環境を作らなきゃいけないなと思って、そのためにはイベントはスピーチだけじゃなくて、もっと他のことも取り入れていかないと。それで、スタッフだけで40人とか50人とか、さらに語劇で10人とか15人とか、イベントの関係者だけで100人ぐらい。他に80人ぐらいはスピーチと予選会に出てます。当日も、芸能人を呼ばずに記念講堂を満員にしたっていう記録も残っていて、そういう意味ではあの第３回っていうのはひとつの大きな出来事だったなと思います」

押　川　「2004年度の卒業生に対してアンケートを取ったんですが、Asia Mixやスピーチコンテストにスタッフや出場者として参加したことがあるという人は約39パーセント。全卒業生の約4割。観客として参加した37パーセントを合わせて76パーセントの学生が何ら

かの形で関わっているということで、大変なものだと思います。舘野さんは出場しましたよね」

舘　野　「私は１年生と２年生の時、２回出ました。あれだけの人数の前で自分ひとりで発表するっていうのはけっこう度胸がつくっていう感じでした」

押　川　「１年生のときも、２年生のときもやっぱり緊張するんですか？」

舘　野　「そうですね。でも、やはり２回目の方がまだ気持ち的な余裕っていうか、余裕まではいきませんけども・・・」

押　川　「タイトルは？」

舘　野　「１年生のときは、私がボランティアをしたときのことを言って、２年生のときは人々との出会いというテーマでした。」

押　川　「実際に壇上に立つと、大体300人ぐらい観客がいて、その前でヒンディー語でスピーチをするというのは、快感みたいなものがある？」

舘　野　「その快感が忘れられなくて、また出るっていう気持ちにさせてくれたんです。達成感というか、凄く気持ちいいっていうのが、嬉しかったですね」

吉　野　「作ってる側としてはこう言ってもらえると嬉しいですよね。リピーターが来てくれると。で、舘野さん、スピーチコンテストに出た後に留学したんですよね？」

舘　野　「そうです、はい」

押　川　「我々の考えるコースとして、１年生２年生で地域言語を学んで、スピーチコンテストや現地研修に参加して、その延長線上で留学というコースが一番理想的な形ですね。その意味でも、スピーチコンテストの意義は大変大きいと思います」

舘　野　「スピコンてみんなに刺激を与えると思うんですよね。ノッてくるって言うか、ちょっと酔う。アジアに酔うみたいな、そんな感じがしたんですね」

押　川　「藤田さんの時代にはこういうのはなかったけれども、どう思いますか。」

藤　田　「やはり、使う場所があるということが語学にはとても大事なことだと思うので、すごくいまレベルが上がってるなぁと思いました。」

押　川　「一昨年、ホームカミングデーをスピーチコンテストにぶつけてやったときに、第１期生、第２期生が来てくれたんですが、昼間はスピーチコンテストを観賞して、自分たちの頃と比べて語学のレベルが格段に上がっていると感心していましたね」

藤　田　「一部の人のレベルを上げるというんじゃなくて、全体的に、底辺が上がってるなって感じがすごくしますね。」

押　川　「最初の年と次の年に１年生が大賞を取ったんだけど、あれ以来出てないね、大賞というのは」

吉　野　「細野さんと小池さんですね」

押　川　「細野さんはヒンディー語でね。その当時、大賞というのは、部門別の、例えばヒンディー語とかウルドゥー語とか各言語ごとの優秀賞と、観客が選ぶ観客賞と、それから学部長が選んだ学部長賞と、この３つを一人で取った人に大賞が与えられたんです。１回目も２回目も１年生で、小池さんは中国語で取った。彼女はその後北京大学に留学しましたね。それ以来、大賞は出ていなくて、１年生が優秀賞をとるということもなかなかない」

吉　野　「最初は、やったもん勝ち的なところがあって、アピールするのが上手かったんですけど、第３回目以降全体のレベルが上がってきて、差をつけるが難しくなってきたんですね。だから、大賞が出ないのかもしれません。」

片　岡　「小池さんの場合、どっちかって言えば動きがあった」

吉　野　「歌、歌いましたよね」

押　川　「それから、例えばベトナム語の野村梢さんなんかは、最初に出たとき、スピーチの真ん中ぐらいで、頭真っ白になったの。壇上に立ったまま、こうやって、最後までね、何にも出てこない。で、最後に頭下げて、退場して。それで終わらないで次の年も出た。次の年は堂々と」

吉　野　「賞取りましたよ。いまアメリカとかカナダに

行ってるみたいですよ。『環境を学ぶ』って」

マーゲル　「海外へ行きたいっていう相談を受けたこともありました。何回も研究室で」

「国際関係学部」の伝統

押　川　「いろんな学生がいたわけですが、ちょっと先生方に印象に残った学生について。その学生をめぐるエピソードとか、何かありますか？片岡先生から」

片　岡　「印象って言えば、個人個人よりもみんなの動きの方が印象に残ってるなぁ」

樋　口　「私も個々の学生というより、『昔はこうだったなぁ』っていう全体での思い出の方が強いですね」

押　川　「どの時代でも『近頃の若いもんは』という言い方をしますが、一方では、『20年ぐらいではそんなに人間は変わらないよ』という言い方もあるわけですね。そこで、この20年間で、学生は本当に何か変わったのかどうか」

新　納　「それはなんも変わってないね。僕は「学生」との付き合いは学内に限ってて、外に出ると、学生と教員という枠が取り払えるときしか、一緒に飲まないので（笑）。その付き合いをした人間だけが残りますね。そういう付き合いというのは、そう変ってないと思うね」

押　川　「マーゲル先生」

マーゲル　「この20年間、何と言っても、英語の授業に関して言えば、学生の素晴らしい想像力はぜんぜん変わってないと思う。学生が自分の想像力で考えて、自分の言い回しで言えるようになるっていうのが、本当に嬉しいですね。授業中にできるだけチャンスを与えて、『こういう場合、どう言えばいいの？ 言い方は一つだけじゃないよ。いろんな言い回し使えるから、考えてみて、言ってみて』って言うと、必ずいろいろ考えてくれて。素晴らしい想像力ですよ。もう一つ言いたいのは、どの学生にも4年の間に必ず喜びの時がやってくるということです。喜びの顔はっきり憶えてるんですよ、この20年間。例えば、『先生、内定貰ったよ』って言う時。あるいは卒論提出で、判子（はんこ）貰う時。泣く学生もいるんですよ。そして、なんと言っても僕は留学関係の仕事が多いですから、行く前と帰ってきてから、ほとんどの学生と話すんですよ。『先生、私、留学して良かったよ。私の人生変わったよ。もの

の見方変わったよ』その喜びの時の、その瞬間の学生の顔が忘れられないと思う、私は、ずうっと。幸せですよ、本当に」

押　川　「片岡先生、なにか」

片　岡　「やっぱし、学生を中心に学生が動く場所、地域研究学会だったら地域研究学会の会館、そういうものがないと片手落ちになるんじゃないかなと思います。そういう場所で自分で喜びを見出す。自分で見出さない限り、人から言われたんじゃぁ、喜びになんないと思いますよ」

新　納　「そういう点で言えば、やっぱり第1回の卒業式だね、忘れられない」

吉　野　「綱引きやったんですよね。それから、鏡割りもあったっていう」

藤　田　「東松山でやったんですよね」

新　納　「板橋でやるんじゃなくて、学生たちがこっちでやりたいと。ダンスパーティーもそのときにやりましたよ。その当時はなんと言っても、こんな扇子をパラパラする時代だったんだから（笑）。だから毎年のように、進明堂の2階でダンスパーティーをやっていました」

押　川　「じゃぁ藤田さんは経験した・・・」

藤　田　「はい。そのとき民族衣装をお借りするんですけど、どういう風に着たら格好いいのか、見たこともないんですよね。写真残ってますけど、着方間違ってるんですよ（笑）。スカートをマフラーにしちゃってて（笑）」

片　岡　「同じダンスパーテーでも『ほかとは違うんだ』っていう認識があったわけ。『我々は民族衣装を着てするんだから』っていうのが、あったんだよねぇ」

藤　田　「そうです。それを着て、国際の授業じゃないところにデモンストレーションに行くんですよ。そうすると、『なんだ？』っていう感じで他の学部の学生が見て。学部ができたばっかりで、どういうふうに国際関係学部らしさを

アピールしていくかということにとても熱心だったときなので、そういう形になったのかなぁと」

片　岡　「進明堂の上の学生談話室がありますよね、あそこは釘を打っちゃいけないんですよ。それを木次谷君だったね。垂木でぜんぶ・・・」

新　納　「要するに大道具。秋田の木次谷という、こいつが何でもとにかく、『デカイもんは任してください』って（笑）」

藤　田　「ちゃんとライトも、ピカピカするのがありました・・・」

新　納　「壁に全部、垂木を網の目のように張り巡らして。そこに釘打って、あらゆるものを引っ掛けた（笑）」

押　川　「この学部ができて20年。国際関係学部の伝統、もしそういうものがあるとすれば、それはどんなものだと思いますか？ 吉野さん。」

吉　野　「伝統は、自由ですよね。4年間本当に自由だから、自分で何かしないとあっと言う間に過ぎてしまいますよね」

押　川　「一般に大学は自由だと思いますけど、その中で国際関係学部が特に他と違って自由だと思うところある？」

吉　野　「自由だと思うところは・・・授業に出なくてもいいとかですかね（笑）。ちょっと言葉では言い表せないですけども、自分で自分の国際関係学部を作れるみたいな、そんな雰囲気はありますよね」

押　川　「吉野さんが入った年が、学部ができて10年ぐらい後で、まだその段階でも学生が国際関係学部を作っていけるという、そういう活動を許容する自由さというものがあったということですね」

吉　野　「そうですね。学生が何か無茶なことをやろうとしても、それを許容できるってことが、良い伝統だと思いますね」

押　川　「藤田さん、いかがでしょうか？」

藤　田　「入学式の日に、当時学部長だった大野先生が『授業に出なくてもいいから、学校に来なさい。学校に来て、あなたの楽しいことを見つけなさい』っておっしゃったのが、今でも忘れられないですね。大学生活ってのは勉強だけじゃないよっていう。それから、大学で専門に勉強したことが直接活かせなくても、普通の生活の中で、人と交流するときでも、子供を育てるときでも、仕事や何かの雑談の合間でもいいんですけど、そういうときにちょっとアジアのプチ博士というんですか、すでに3,500人近く現地研修に行ったということで、そういう底辺が広がっていくってところが伝統じゃないかなという気がしますね」

押　川　「それは非常に嬉しいことでしてね。今年、文部科学省に出した『特色ある大学教育支援プログラム』の申請書に、こんなことが書いてあります。『アジアと関わる卒業生』という項目がありまして、大東文化大学国際関係学部の教育の目的というのは、例えば、政治家や外交官といった政策決定者を育てるのが主な目的ではなくて、アジアへの共感を抱きながら、アジアと同じ目線を持って、それぞれの場で――それは職場でもいいし、働いていない主婦でもいい――自らの工夫と努力でいろんな活動を切り開いていける力を育てること、それが我々の教育の目的であると。実際、例えばアフガニスタンやパキスタン、あるいはベトナムでNGOの活動をしている人がいます。本当に多彩な卒業生が出ているんですが、いま藤田さんがおっしゃったことは、我々の20年間の教育の一つのあるべき姿を示していると思います」

藤　田　「アジアのことを学ぶというのは、多分、いろんな価値観を学ぶっていうことだと思うんです。一つの国の中で宗教が違ったり、言語が違ったり、民族が違ったりして、そんな社会で人々がどういうふうに上手く生きていくのかを学ぶのは、異なる考え方をする人とぶつかったときに、自分がどれだけ主張して、相手のことをどれだけ認めてあげられるのかということにつながると思います。大学を出て、実際に私が仕事をしたときに、それはとても役に立ったような気がしますね」

押　川　「在校生にとっては伝統といっても難しいと思いますけど、舘野さんはどのように感じますか？」

舘　野　「私はこのキャンパスで3年ちょっと過ごしてきたんですが、いつも思うことは、国際の人は所属意識が強いということですね。他の学部の人は2年で板橋に行って、私たちだけ4年間ここに残るっていう仲間意識が伝統で、すごくいいことだなぁって思います。」

押　川　「それは他の学部の先生方からもよく言われる。ある種の羨望を込めてね。『国際関係学

部の学生は学部に対する帰属意識が非常に強い』と。それから、学生と教員の接触の時間と空間が、恐らく他の学部の教員と学生の関係よりずっと濃厚で、これは大切にして行きたいと思いますね」

マーゲル　「独特な雰囲気ですね」

吉　野　「垣根がないですよね。教員と学生の垣根がない。国際と文化の垣根もない。学生間の学年の垣根がない。普通に４年生と１年生が知り合いだったりして、いろんなことやったりするってところが国際の良いところだと思いますね」

押　川　「確かに教員と学生の垣根はなくなってきている。最近はタメ口をきくとか」

吉　野　「タメ口ですか。さすがにそれは（笑）。それは放り出した方がいいっすよ（笑）」

舘　野　「その垣根をなくすのが、Asia Mixであったり、Asia Weekであったり、スピコンであったりする。交流の場が多いことが垣根をなくして、みんなの帰属意識を高めるんだと思いますね」

押　川　「おそらく教室の講義だけではこういう意識は生まれないと思います。教室外のいろんな活動が大事ですね」

片　岡　「地域研究学会の建物、ああいう建物絶対に必要でしょうね、学生にとって」

押　川　「伝統ということについて、新納先生いかがでしょうか？」

新　納　「教員の視点から見るとね、あんまりない方がいいかな（笑）。学生にとってはあった方がいい。いくつか僕も仕掛けたことがある。第１回の卒業式の綱引き大会を伝統にしようと思って、数人の学生と一緒にやったんですから。それが１年で潰れたというのは大変なショックで。この学校は伝統は要らないらしいという（笑）。僕にとってはやっぱり、エリート主義集団を目指してないというのが伝統だと思うんですよね。僕自身、アジアとの関わりを持ちはじめたときから、その意識を持ち続けていたなぁというふうに」

押　川　「樋口先生はいかがですか？」

樋　口　「やっぱりさっきおっしゃった自由ですね。本当にみんな仲良く、先生と学生との垣根がちょっと無さ過ぎるときもあって困ることもありますけれども（笑）。この前も授業で、『あなたはどこのゼミの学生ですか？』って訊いたら、『～さん』って言うんですよ。先生をさん付けで呼ぶのは止めた方がいいって言ったら、『え、知らなかった！』って言うんですよ。でもこの自由な校風は、例えば現地研修で何週間かみんなと一緒に過ごしたりするうちにできてくるものだから、どんどん伸ばしていった方がいいと思います」

押　川　「マーゲル先生どうですか？」

マーゲル　「どの組織でも人間関係が一番大事だと思うから、学生同士、先生同士、学生と先生との間の人間関係が本当に上手くいってると思うんですよ。夜遅くまで先生と学生が研究室でやってるというのがね」

押　川　「それは全学的な認識でもあるんですけど、第二研究棟の右側が我々で、左側が他の学部の研究室ですが、夜の６時半以降の電気のつき方が全然違う。右側の方が遅くまでついてる。それから、学生が研究棟に入ってきて、どっちに流れるかというと、左側にはほとんど行かないで、右側に行く。そんな点も大事にしていきたいと思いますね。片岡先生いかがですか？」

片　岡　「伝統というほどでなくても、長く続けていくことが重要だと思うんですよ。そのためには、繰り返すんですけども、学生の居場所、物理的な場所が必要だと思います」

新　納　「あの、25万円で手にした」

片　岡　「25万円・・・」（笑い）

新　納　「25万円を捨てたことで360万円を得たんだ」（笑い）

押　川　「ちょっと待って、その話・・・あの地域研究学会の今の建物、あれは二代目ですよね」

新　納　「いや、いろいろ改修はしてますが、あれはあのまんまですよ。初代のまま・・・」

押　川　「そもそもあれができた経緯は？」

新　納　「あれはね、92年頃かな、学部長がとにかく溜まり場が欲しいよなって。じゃ要するに独立した建物があればいいんでしょって。高坂周辺歩き回ってたら、プレハブ、要するにまだ工事やってて。飯場のプレハブがちょうど解体中だったんで、訊いたんですよ、これ何とかならないかって。そしたらもうほとんど廃棄状態のものだから、25万でいいって。大野先生連れてったら、びっくりして言葉を失ってたんで、ペンキ塗っときゃ結構きれいになりますよって（笑い）。そしたらね、しばらく考えてから大野先生がニタって笑って、これ

でいいって。で、その翌週かな、トラックで運んでもらったんですよ。大野先生が管理課連れてきてね、ここに建てさせてくれと。管理課がそれ見てぎょっとしたわけですよ。こんな汚ねえもの建てられたんじゃどうにもならないって。まだきれいな出来たばっかりの大学で。それで翌年予算を作って（笑い）」

押　川　「で、その25万円の飯場が・・・」

新　納　「360万になったそうです。25万のはほとんど廃棄して、管理課が納得のいく物をあそこ建てたわけです。だから、最初はきれいにしとこうと、スリッパ買ってきてね。毎年磨いてた。土足で入るやつを３年目に見つけたとき、頭きたもんね。お前ら何してるんだ」（笑い）

押　川　「吉野さんが活動した頃はもう年季の入った建物」

吉　野　「年季入ってましたね。床が二回くらい抜けましたね」

押　川　「何度か補修をしたんですか?」

新　納　「そう。あと、便所をね。外側に簡易トイレを２年目か３年目に」

吉　野　「あれもう使ってないですね」

新　納　「中に入ってるときに倒したやつがいてさ（笑い）。『大丈夫だったか』って訊いたら、『怪我はしなかったけど、臭かった』とか言って。なにやるかわかんねえなって」（笑い）

押　川　「日当たりはいいよね」

吉　野　「フェンスの向こう側の土手は夏なんか涼んでるといいですよ」

押　川　「昔は大学の自治会とか、ああいう活動は大体地下のじめじめした暗いところだったから、そういうイメージからすると、あそこはモダンなところだな。」

マーゲル　「私は一回だけ入ったことがあって、冬だったんだけど、学生がコート着てるんですよ」（笑い）

吉　野　「エアコンが入ったんですよ、いろんな紆余曲折をへて。今は結構快適なんじゃないかなと思いますけど」

「国際関係学部」の未来

押　川　「いろんな話を伺ってきまして、そろそろまとめに入りたいと思います。今回は学部創設から20周年ですが、これからさらに10年、20年と続いていく。先程この学部の伝統という話がでましたが、伝統というのは決して古いものがそのまま残るというものではなくて、その都度更新しながら残っていくものだと思います。それで、そういう伝統を踏まえて、20年後にこの学部がどんな学部であってほしいか、あるいはどんなふうに変ってほしいかという、大学と学部の未来像があればお聞かせ頂けますでしょうか。一番若い舘野さんから」

舘　野　「そうですね。今のような感じで。今私が大学で学んでいて楽しいんですよね、とても。先生方と交流もありますし、学生同士も。そういう笑顔溢れる楽しい学部でいてほしいなって思います」

押　川　「吉野さんはどうですか？」

吉　野　「20年後も遊びに来てたいですよね。今日もAsia Mixの打ち上げに参加するんですけど、そんな形で世代を越えた交流ができる、そういう学部でずっとあってほしいなって思います」

押　川　「その点では、ここは立地条件からいってかなりハンディキャップがある。ここまで都内とか勤務先から足を伸ばしてちょっと行ってみようかと思うにはなかなか遠い。けれども今吉野さんが言ったように、卒業生が帰って来やすい、そこに帰ってくれば、かつて吉野さんがやってたのと同じような活動をやっている学生達がいて、時間を飛び越えて話ができる。そんな雰囲気を残していきたいですね。藤田さんはどうでしょうか？」

藤　田　「20年先ってかなり先なんですけど、子供も減っていくので、大学は18歳以上であれば誰もが来られて、期間も４年間だけじゃなくて、地域の人なりOBなり、例えば自分がやってたことをもうちょっと何か知りたいというときに気軽に来られたり、あるいは学生の時やらせてもらったグループ活動をもう一回やるチャンスが与えられるというような場所であってほしいと思います。国際関係学部はその可能性が大きいのではないでしょうか」

押　川　「それは現在文部科学省の政策にもなってい

て、大学はもっと地域や社会人や家庭の主婦に開かれたものになるように求められている」

藤　田　「ほんとうに先生に質問したくなるのは卒業してからですからね」

押　川　「そうですね。片岡先生いかがです」

片　岡　「20年たっても人間自体はあんまり変わんないですよね。だから、20年前の学生と今の学生そんなに変ってないと思うんだ。じゃ、どこを変えるか。今藤田さんや学部長がおっしゃったような方向かな」

押　川　「地研のスローガンでいいのがあったじゃない、2年ぐらい前に。『変らずにいるためには、変らなければいけない』」

吉　野　「それは僕がいた頃に作られた、2001年か2002年のやつじゃないですか。『山猫』の一節です。『山猫』っていう映画の」

押　川　「あっ、ヴィスコンティの」

吉　野　「だと思いますよ。小沢一郎が好んで使ってる」

押　川　「あっ、そうなの（笑い）。樋口先生何かありますか」

樋　口　「やっぱり卒業生が帰りやすい場所であると共に、留学生にもっと来てほしいんです。そのためにカリキュラムをもう少し日本のことをできるように改革できないかなぁと。そうすれば、もっと留学生が来ると思うんですけど」

押　川　「今、留学生は全学で確か500人くらい。この他に東松山市に住んでいる外国人が1,800人くらい。そういう人たちとの交流を進めたいと思っています」

樋　口　「正式の留学生として来てもらうだけではなくて、自由に好きな講座だけ取ることができるという形にすれば、この学部の特徴がより活かせるのではないかと思うんですけど」

吉　野　「在学中に東松山の国際交流協会ってのがあって、地研の連中連れて料理教室かなんか行きましたよ。料理をふるまったりとか」

押　川　「今度のアジアミックスの2日目は、新里先生の紹介で鳩山町の70歳以上の老人達が何十人かまとまって来て。」

新　納　「3日目も来たよ（笑い）『こりゃあうまい』って。町の人たちは非常に刺激を受けて、大東はすばらしいという結論で、自分達もいろいろやってみたいという気持ちになりましたって。だから今度ジャガイモ堀りやりましょうって言ってるんですけどね。」

押　川　「マーゲル先生、20年後は。」

マーゲル　「20年後の日本はだいぶ変るでしょう。日本のどの町にも労働者とかいろんな外国人がやってきて住むようになる。そのときに我々の学部の学生はそういう人たちとうまく人間関係を作れるかですね。そういう内容の教育をやった方がいいと思うんですよ。」

押　川　「そうですね。この学部の教育の目的は、自分の住んでいる街や地域でアジアの人とあるいは世界の人とどういうふうに向き合うのか、もしインド人であればヒンディー語でやりとりができるという、そういう現実のアジアの人たちと向かい合う能力を身につけてほしいということで、決して企業に勤めて派遣員としてアジアに行くとか、そういうことだけじゃないと思います。新納先生いかがでしょうか？」

新　納　「20年後はもう自分のことしか考えてないからね。僕は停年になるわけですよ（笑い）。やりたいことは今でもやってるけど、停年になるとさらにできるだろうと思ってます。その仲間が3,500人弱できたということですよ。もちろん国際の卒業生だけに限定する必要はないんだけれども、その資産を活かして広げていきたいと考えてますね」

押　川　「この20年間に現地研修に参加した学生が3,373人。一ヶ月とはいえ、アジアの生の体験をもった人間を一つの学部がこんなに生み出すというのは、大変な財産です。こういう人たちを含む約3,800人の卒業生がすでに社会に出て、いろんな職場で働いたり地域で活動したりしているわけです。20年後の学部がどうなっているかはわかりませんが、これまでの20年間で培ってきたものを大事にしながら、次の10年後、20年後につなげていきたいと思っております。今日は2時間という長時間に及びましたが、ひとまずこれで座談会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました」

（編集協力：山崎純一、岩田宏介）

1998年３月退任
国際関係学科

林　理介先生

生涯、駆け抜けてもう十分。いや、やり残しがあるので生きていたい。こういう矛盾した気持ちが僕にはある。自ら大戦争を体験し、戦後は繁栄の我が国から、逆の世界で革命や中小戦争を見聞して、はや80年。ジャーナリズムと学会の２つの分野を渡り歩いた僕の人生のなかでも、印象ぶかかったのは草創期国際関係学部の教員12年。いまも毎日、水泳で身体を鍛えながら、中印の台頭と、欧米日露の相克を、時々、講義している。

1998年３月退任
国際関係学科

柳沢雅一先生

国際関係学部は、マルティディシプリナリーのアジア地域研究の学部として発足しました。

在職中は、地域研究はそもそも大学院コースではないのかと考えていました。しかし、一方では、学部コースで、いわば入門編として地域の勉強をするのも一方法かと思っておりました。

私の担当は南アジアと開発経済学でした。幾年にわたり巣立って行った学生のそれぞれの面影が今も眼に浮かびます。

1998年３月退任
国際関係学科

鳥羽嶺次郎先生

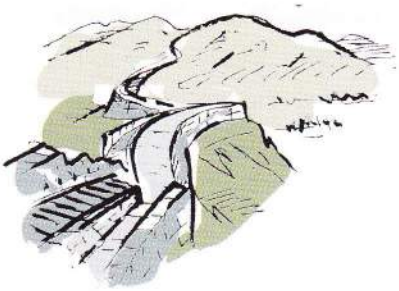
井の頭線、ＪＲ武蔵野線、東武東上線と乗り継いで片道２時間半の通勤は、かなりしんどかった。しかし研究室に着くと、（ノーロックにしてあるので）十数人のゼミ生プラスその他の学生諸君諸嬢が座り込み、食事をしたりお茶を飲んだり、ワイワイガヤガヤやっている。中々良い雰囲気だった。当時私は東京外語大の講師もやっていたが、学生気質をあえて比較すると、大東文化大の方が素直だった。「君たち、山賊みたいだな」とからかった。「山賊の会」をやることになっているが、これは残念ながら、まだ果たせない。

2004年３月退任
国際関係学科

片倉邦雄先生

比企丘陵に響くホトトギス、鶯の鳴き声、紅葉のキャンパス、海外雄飛を夢見る元気印の学生に囲まれて勤務した５年間。中東アフリカ地域から帰国したばかりの小生にとってフレッシュな体験でした。地域研究に打ちこむ教員仲間、暗夜行路を親切に導いてくれた警備員の方々、そして実社会に出ていったゼミ生ひとり一人、頭を離れません。時折、サウジ大使館専門調査員のＡ君、サッハリン天然ガス計画のＢ君、そして北京社会科学院研究員Ｃ君に逢えるのが楽しみです。

私は当学部の大学院設置の要員の一人として、1999年4月に赴任し、5年間お世話になっただけであるが、この学部の雰囲気と周囲の自然環境がたまらなく好きであった。4月の新緑につつまれて新学期が始まり、夏休み前まで続くうぐいすの鳴き声に心癒された日々が懐かしく思い出される。このような環境のなかで、学生諸君もまたのびやかで、教員とのふれ合いも好ましいものであり、私の教師生活の最晩年の楽しい日々であった。



2004年3月退任
国際文化学科

平野　正先生

国際関係学部創設20周年とのこと、慶賀にたえない。感慨深い。故香坂順一郎元学長がいきなり勤務先に来られ国際関係学部なるものを創設するから協力してほしいと言われた時から数えると25年は経っていよう。学部創設の実質的立て役者で苦労された長澤順治元常務理事の顔が浮かぶ。呱呱の声をあげてから世に送り出した卒業生は4000人を超えよう。

2006年6月、北京と上海に各々1週間滞在する機会があった。住所がわかっているゼミ生だけで北京に4名、上海に5名いる。上海では5名全員女子で参集し、ごちそうしてくれた。名刺をもらって驚いたのは課長や部長の肩書きがつき、第一線で活躍している。中国語ができなくて半べそをかいていた子が、小生よりずっとうまくなり、それを駆使して仕事をしている。出藍の誉れだ。

一つのゼミでそれだけいるのだから、学部卒全体ではおそらく20～30名は中国にいて活躍していると思う。北京には一橋大や外語大のOB会があって毎年会合している。大東大OB会支部がかの地にも組織できたらと思いつつ、帰国した。

2004年3月退任
国際関係学科

小島麗逸先生

本学部（大東文化大学国際関係学部）は他大学の国際と名のつく類似の学部と異なり、アジア地域の教育・研究を中心とする学部として出発し、アジアの9カ国の言語と現地研修を選択必修科目とするカリキュラムを特色としてきました。退職後一番思い出深いのも、インドのラージャスターン大学とパキスタンのカーラーチー大学での現地研修の体験です。アジアの特異な教育・研究センターとして今後一層の発展をお祈りいたします。

2005年3月退任
国際関係学科

多田博一先生

北京大学

Peking University, CHINA

Daito Bunka University has begun sending students to Peking University since 1988. During these 18 years, we have maintained a friendly cohesive relationship. Up to now, 465 students from your university have come to Peking University to further their study, and a great many professors from your university have visited Peking University, which has greatly enhanced their knowledge about Peking University, Beijing and even China. Our academic exchange has also promoted the development of cultural exchange between China and Japan. And I hope we can bring our cooperation to a further development and thus make a greater contribution to the cultural exchange between our two countries.

Peking University

上海師範大学

Shanghai Normal University, CHINA

It has been a long time since our two universities established our educational exchanges and academic cooperative relationship. And we have also made great achievements thanks to our joint efforts. Every summer groups of students from your faculty come to study Chinese in our college. We are very honored to host the study tour program for them. The students not only study Chinese and Chinese culture but also show the Japanese culture to Chinese students. It makes great contribution to the exchanges of our two universities.

We sincerely hope that our friendly relationship will be enhanced with our unremitting efforts in the future and it will make more contributions to the friendship between Chinese people and Japanese people.

Shanghai Normal University

シーラーズ大学

Shiraz University , IRAN

It's now 15 years that Shiraz University and Daito Bunka University have signed a memorandum of agreement. From 1990, once a year, a number of Japanese students have visited Shiraz University to improve their knowledge of Persian. Their visit normally takes two weeks. During their visit to this university every morning they participate in Persian classes held by linguistics department.

Every afternoon they are also be given the chance to participate in cultural associations and congregations such as public lectures and speaking programs, students clubs and seminars. Field-trips, visits to historical places, outdoor activities, cinema, and picnics will also be organized for these students. They will have visits to the university departments, libraries, and campus as well as cultural and historical sites and shopping centers of the city. In the weekend they visit historical monuments outside Shiraz, including Persepolis. According to this program the PLLP students will also participate in conversation with native speakers and can measure their achievements.

Shiraz University, IRAN

ラジャスターン大学

University of Rajasthan, INDIA

We the faculty of South Asia Studies Centre, University of Rajasthan, Jaipur are immensely pleased to express our greetings and best wishes to the faculty of International Relations, Daito Bunka University, Japan on the occasion of 20th anniversary celebrations and for successfully bringing out the 20th anniversary brochure which has lucidly reflected upon the major achievements of the prestigious institution of Daito Bunka University in the preceding two decades. We hope this brochure will guide and enlighten the students to avail the better opportunities available at your prestigious institution. We feel deeply honoured and hope to continue our long association and academic interaction with the faculty of International Relations and wish all-round success to the teachers and students devoted to the mission of Hindi Language Learning.

University of Rajasthan, INDIA

1989年度卒業
国際関係学科

片岡 和子さん
（旧姓・狩野）

埼玉県在住

国際関係学部に在籍して

第一期生であった為か、定かではないが、学生達は皆、先生方に暖かく接して頂いていた。しかし、入学してはみたものの、様々な言語が混じる授業についてゆけない気がして不安だった。でも、研究室で外国の話を聞いたり、友達が作ったエスニック料理を口にするうちに、不安は消えていった。

振り返ってみると、語学をもっと勉強すべきだったという思いはあるが、四年間、楽しかった。

卒業後、証券会社に就職。退職後、結婚し、子供もでき、楽しい日々を送っていたが、一昨年前に、人生で最大級のつらい思いをした。周囲の人に心境を打ち明けられず、苦しい日々だった。そこで、何年かぶりに、現地研修で一緒だった友人に会うことにした。

不思議だが、その友人には、つらい状況を話せた。大学の四年間は、大切な時間だ。何をするかは、その人次第。

私は、決して、友人は多くないが、貴重な友人、恩師に、国際関係学部で出会えて良かったと思っている。

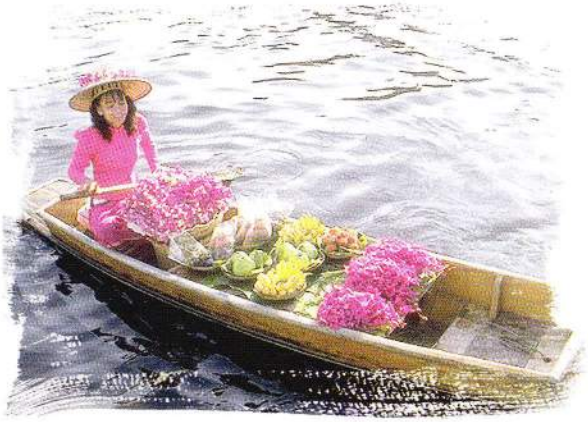
1990年度卒業
国際関係学科

鈴木いづみさん

日本語教室経営
千葉県在住

ヴェトナムで学んだこと

私が大東文化大学に入ろうと決めたのは、在学中に実施される現地研修制度があるからでした。今でこそヴェトナムは経済面において日本と緊密な関係を持ち、また観光地として多くの日本人がヴェトナムという国に関心を持つようになりましたが、当時はヴェトナムといえば戦争、難民、貧困というイメージしかない国でした。国際関係学部はヴェトナムについて学べる数少ないチャンスの場でした。卒業後にヴェトナムに2年半滞在し大学で学び、働き、この2年半で様々なことを学びました。



それは日本人としての誇りと日本を客観的に見ることの大切さでした。いかに日本がすばらしい国か、また日本人ではない人達との全ての相違を明確に認識することの必要性に気づかされました。

現在日本で外国人対象の日本語教室を経営していますが、大東文化で学んだことやヴェトナムでの留学経験なくしては今の私は存在し得ないと思っています。

学部設立 20 周年おめでとうございます

1991年度卒業
国際文化学科

福来 順子さん
（旧姓・藤田）

現在専業主婦

私は昨年まで、精神科クリニックの「デイケア」という、主に回復期の患者さん達が集団で過ごし、人との関わりの中で治療していくリハビリテーションの部署で、精神保健福祉士として働いていました。

働き始めた頃は、皆で同じことをするのがよい治療と思っていたのですが、患者さんが持つ性格や目標などを尊重しながら、徐々に柔軟な関わりを心がけるようにしました。

「相手がどう思っているのか」、「自分の考えをうまく伝えられるか」、「どう折り合いをつけるか」ということは、国際関係の最前線だけではなく、職場や家庭でも日々ぶつかる問題です。

「ものの見方、対処の方法はひとつではない」と、アジアを通して大学で学んだことが、精神科勤務でも役に立ちました。

1991年度卒業
国際文化学科

緑川康介さん

公務員
東京都在住

1．近　況

某省庁で事業担当をしています。転勤族でしたが、官舎が手狭になったために自宅を構え、いつ訪れるとも知れぬ単身赴任に戦々恐々としている毎日です。

2．学生時代の想い出

初の海外旅行ともなったパキスタン現地研修が最もセンセーショナルな出来事でした。ウルドゥー語履修という動機付けがなければまず行くことは無かったでしょう。

外国語でコミュニケーションを図ることの楽しさを肌で学んだことが、その後の他言語習得の原動力となりました。

3．学生時代に学んだことの現在への反映

ウルドゥー語履修経験が契機となり、後にコリア語を学ぶ機会を得ました。また、現地研修によって得た自分なりのイスラム観が、近年一層関係が深まりつつあるイスラム国家関連の業務において何かと役に立っています。

4．大東文化大学国際関係学部への期待や在校生へのメッセージ

（1）学部への期待

「アジア＝大東の国際」と呼ばれる地位を占めて頂くことを願って止みません。

（2）在校生へのメッセージ

社会に出て14年。明らかに自分の専門外のことでも、いざやってみると意外とできてしまうことが多かったような気がします。まずは挑戦ありきかと。

1992年度卒業
国際文化学科

桑子　淳さん

人材派遣業
東京都在住

学生時代……今から15年以上前のことだ。

当時の私は、勉強よりもバイトや酒飲みに明け暮れていた。たまには学校に行くこともあったが、それでも授業にはほとんど出ずに、一日の大半を中庭や図書館で過ごした。学校、授業の類は性には合わなかったが、それでも好奇心や知識欲は旺盛で、本はよく読んだ。

思えば、東松山での生活は私にとって、人生の価値観や生き様といったものを模索する貴重な期間だったのだと思う。

当時の国際関係学部には、私の様な体たらくの学生とは異なる「アジアを勉強したい」という情熱に溢れた人達がいた。聞き慣れない言語の響きや手作りのイベントなど、ユニークで自由な学風だった。現地研修で訪れたパキスタンは強烈だった。そこでの経験はなぜか「今後どこに行っても何とかなる！」という不思議な自信を私にもたらした。

実際、その後の私は、アメリカとイタリアへの留学を果たし世界一周も経験した。

現在の生活に直接的に生かせる事は少ないものの、この「何とかなる！」は今も私の中に力強く生きている。

1992年度卒業
国際文化学科

フィリップス光子さん
（旧姓・大塚）

現在は専業主婦
東京都渋谷区在住

エジプト現地研修

私はアラビア語を専攻していたこともあり在京クウェート大使館に10年程おりました。大使館で働く前は2年間カイロでエジプト政府高等教育省の奨学生としてアラビア語を勉強していました。

その頃、アレキサンドリア大学と新たに提携を結ぶということで教授に同行し、提携後は現地研修の学生達と同大学を訪れました。そこで改めて私の在学中のアシュート（イスラム原理主義過激集団の活動拠点と言われる）大学短期留学を感慨深く思いました。明るく開放的なアレキサンドリア大学に比べると天と地の差。アシュート大学での授業、寮での幽閉されたような生活。これ程、私達の生活とかけ離れた暮らしがあるのかと衝撃でした。引率の教授を含め（私を除く）参加者全員が一度は倒れるという凄まじい研修旅行でした。それでも私にとってアシュート大学での生活は一生忘れられない想い出です。

貴重な体験をありがとうございました。

1994年度卒業
国際文化学科

山田康代さん

石垣市役所勤務
沖縄県石垣市在

チャイハーネ

中東へ関心を抱いていた私は、必修科目にアジアの九つ言語から一つを選択し、提携している大学で学べるというカリキュラムに魅力を感じ大東文化大学国際関係学部を選びました。イスラムの歴史や文化を学ぶなか、特に女性の社会への関わり方に興味を持ち、卒論では、男性が取り仕切っているスーク（市場）と、女性の役割が中心となっている私の地元である沖縄のまちやーぐわー（市場）を比較研究しました。思想や文化を創ってきた其々の歴史風土を自分の目で見て学ぶ機会をもてたのは、指導していただいた先生方や国内外の出身地の異なる友人たちと出会えたからこそだと感じています。自然環境に恵まれた大学にて経験豊かな先生方の講義を受けて視野を広げることができたこと、大学時代に出会えた各地にいる友人たちとのネットワークは私の貴重な財産となり、現在、行政の立場で仕事をしていく中、また地域の伝統行事に関わっていく中で活かされています。

1995年度卒業
国際関係学科

鯨井伸一さん

ジブラルタ生命保険株式会社
仙台支社業務部長

学部創立 20 周年を迎えるにあたりまして

学部創立20周年、おめでとうございます。私が卒業しましたのが、1996年３月なので、卒業してから丸10年経過いたしました。現在の私はジブラルタ生命保険(株)で支社(支店)にて支社業務部長という職についております。

社会人になり、改めて振り返ると学生時代の経験が、今の自分にとって非常に役に立っていると考えるときがあります。国際関係学部というのは他学部と違い、他の国々の学生の方とも接する機会が多い学部です。その為、日常の生活において自分とは異なる思考、宗教等と交流する必要があります。当然、自分と異なる考え方に接するわけですから、多少なりの戸惑いを持ちながら、その人との関係を保たなくてはいけないわけです。社会というものも同様のことが言えます。職場というものも共通のビジネス(課題)を多くの同僚の手で成功をさせるという課題を持っております。同僚の中にはそれぞれ違う考えを持った人間が集まっております。私が勤務しているジブラルタ生命は外資系企業のため、もしかしたら一般の企業より、その頻度は濃いかもしれません。そのような意味では国際関係学部での経験は非常に役に立ったといえるでしょう。

最近はアジア圏での目まぐるしい経済発展が注目されております。私たちの業界も今後のマーケットとしてアジア圏を非常に重要視しております。そのような知識・経験を持っている若い方が企業にとっても必要な人材となることでしょう。

今後の国際関係学部の更なる飛躍を期待いたしますとともに、学生の方たちの活躍を期待いたしまして創立20周年のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

1995年度卒業
国際文化学科卒

保坂美樹さん

現在、法科大学院生
埼玉県在住

大学を卒業してから早いもので10数年が経過した。今、この10数年を振り返ってみると、大学時代に熱心に習得した「インドネシア語」のおかげで、卒業後は仕事に困ることはなく、むしろ幸運にも、希望する職場で好きな仕事を存分にしてこられたと思う。

社会人となってちょうど10年目、私は何か新たな挑戦をしようと考えた。これまで培ってきた語学力と専門知識の他に、何かもう一つ別の分野で専門知識を得たいと思い、悩んだ末に法律を学ぶ決意をした。

平成17年には、法科大学院へ進学し、現在は司法試験を目指して、法律三昧の日々を過ごしている。もっとも、法学未修者の私にとって、その道のりは想像以上に険しく、時には弱音を吐きたくなることもある。

しかし、現在の自分を他人と比べてどうかではなく、昨日の自分と比べてどうなのかと自身を鼓舞し、その可能性を信じて日々前進している。謙虚な心を忘れず、人間性豊かな法曹を目指したい。

1996年度卒業
国際関係学科

権　寧俊さん

県立新潟女子短期大学
国際教養学科専任講師
新潟市在住

私は韓国留学生として国際関係学部に入ってから、日本語や中国語の勉強をはじめ、様々な葛藤、悩み、挫折を人一倍味わってきました。そのときに助けてくれたのは、先生は勿論、日本人の学生や中国の留学生たちでありました。その助けによって、語学を学ぶ喜びを感じることができたと思います。そして、それを「武器」として今では自分が好きな研究に取り組むことができるようになりました。

学部の先生方は、有能な研究者であるばかりでなく、立派な教育者でありました。そういう先生方に教えてもらったことが、今でも私の自慢の一つであります。また、キャンパスも、都会の雑踏から離れているため、教育・研究に集中するには理想的な環境であり、施設や蔵書なども充実していたので、私は大変恵まれた環境で勉強ができたと思います。特に学部時代のゼミ指導教官であった内田知行先生には、卒業論文指導だけでなく日常生活から、進路指導まで、あらゆる面でお世話になっています。

現在、学生を教える立場に立ってみると、先生方の教育にかける熱意がどんなに熱いものであったかが再認され、あらためてそのありがたさが感じられます。

在学生の皆さん、国際関係学部で勉強していることに誇りをもって頑張って下さい。